ずいそう

青い地球

桐　谷　祥　治

建設会社で30年あまりシールド工事に携わり，現在はレンタル会社で，シールド機械のレンタル化の仕組み作りに挑戦している。

子供のころから天体に興味を持っていたが，地面の下のトンネル工事を職業にするとは全くの予定外であった。最近，天体への思いがふつふつと湧き上がり，「皆既日食」「オーロラ」観測に，エジプト・アラスカへと出かけてきた。

「皆既日食」は長年の夢であったが，なかなか出かけるチャンスが作れず，テレビの中継を録画するなどして間に合わせていた。2006年3月29日，リビア・エジプトからトルコにかけて皆既帯の伸びる日食が起こる。砂漠地帯を通るため，晴天率が高く，しかも皆既継続時間が4分前後，絶好の条件である。

天文雑誌にいろいろな「日食ツアー」が掲載され，それらの中からエジプトツアーを選定し，意を決して遠征することになった。観測地は，エジプトの西のはずれ，リビアとの国境近くで，地中海に面した「サルーム」というところである。国境警備隊の管理地の中に，観測村が特設された。

前日の朝，カイロのホテルを出発し，バスで一路サルームへ向けて走り出した。砂漠の中を走り続けて，観測村に到着したのは夕方であった。砂漠の地平線に沈むみごとな夕日が歓迎してくれた。

観測村にはテントが設営されており，そこで翌日の日食を待つこととなった。世界各国から多くの日食ファンが集まってきており，大変な賑わいであった。私が参加したのは，いくつかの日本の旅行社が企画したツアーの一つであるが，170名もの参加者があった。他の旅行社・他の観測地（リビア・トルコ）も加えると，どれだけ多くの日食ファンが参加したか，計り知れないほどである。

多くの参加者は，ベテランが多く，天体望遠鏡などの観測機材の設置に，前夜から大忙しであった。私は，デジタル一眼レフカメラと三脚という極めて軽装備で臨んだ。いよいよ日食が始まった。太陽がだんだん細くなり，12時38分，ついに皆既になった。一瞬で，太陽の周りにコロナが輝きだし，星がはっきりと見える。全くの別世界に入ったようで，思わず歓声を発していた。周りからも聞こえてきた。われに返って，シャッターを切り始めた。皆既終了時には，ダイヤモンドリングも何とか撮影することができた。

「オーロラ」も，長い間観たいと思っていた。日食の同行者からも勧められ，今年の2月8日からアラスカのフェアバンクスまで出かけてきた。せっかく遠征するからには，観損じの無いように事前準備を行った。と言っても，太陽活動と月齢をインターネットで確認する程度であったが。

結果は，幸運にも4泊すなわち4回のオーロラチャンス全てで観ることができた。日食向けに奮発して購入したカメラで，オーロラも何とか撮影に成功することができた。

表題の「青い地球」と関係の無い話が長くなってしまった。本題に移ろう。

「地球は青かった」と言う言葉はあまりにも有名で，解説不要と思われるが，あえて復習させていただく。1961年4月12日に人類最初の宇宙飛行士となったユーリイ・ガガーリンの，地球帰還後の言葉である。この言葉の信憑性については，宇宙飛行士でなければ確認出来ず，ただイメージを膨らませるだけであった。

しかし，科学の進歩はすばらしく，居ながらにして「青い地球」を見ることが出来るようになった。日本の月周回衛星「かぐや」に搭載されたハイビジョンカメラの映像を，インターネットで見ることが出来るのである。月平線の向こうに浮ぶ「青い地球」の美しさは何とも言えずにすばらしいものである。

宇宙空間のなかでもこれ以上に美しい天体を探すことは出来ないと思う。この「地球号」に乗って宇宙を旅していることに感謝するばかりである。「青い地球」には国境線が見当たらない。しかし，絶え間なく紛争が続き，環境破壊も進んでいる。みんな「地球号」の乗組員である。仲良く協力して何とかできないものか，と考えつつ，次回の日食観測を企てているところである。

――きりたに　よしはる　㈱アクティオ　技術顧問――